

世界農業遺産「静岡水わさびの伝統栽培」認定地域における

ゼブラツーリズム研究プロジェクト

静岡県立大学 国際関係学部 湖中ゼミ

指導教員 教授：湖中真哉

参加学生：佐藤理央、鈴木利康、恒田ともか、平野穂乃佳

1 要約

本研究では、「観光客によるワサビ生産地へのオーバーツーリズム」という課題に対し、ワサビ生産者や伊豆市内の飲食店経営者へのインタビュー調査、伊豆市が事前に検討していたサイクリングコースの試走を行い、ワサビ生産の環境保護と観光振興を両立する観光の在り方を検討した。ワサビ生産環境の保護と観光振興を両立することは困難であるが、調査を通して、ワサビ生産者が観光客を許容でき、かつ観光客が満足できるような狭いスイートスポットを模索した。

調査結果から、ワサビ生産の環境保護と観光振興の両立のために、ただ景観だけを楽しむ観光ではなく、観光客自身がワサビの物語性を理解しオーナーシップ（当事者意識）を持つことができる観光の在り方が必要だと考えた。そこで当研究チームは、新しい観光の在り方として「アンバサダーツーリズム」を提案する。アンバサダーツーリズムは当研究チームが考案したものであり、ただ景観を楽しむ観光ではなく、生産の背景や場所といった物語性を理解し、当事者性を深める観光の在り方である。

2 研究の目的

「静岡水わさびの伝統栽培」が世界農業遺産に認定され、伊豆市のワサビに国内外からの注目が高まっている一方、観光客によるワサビ田への侵入やゴミのポイ捨て、ワサビ生産時に使用する場所や道を観光客がふさぐといった問題も浮上しており、ワサビ生産者が迷惑を被っているという課題に直面している。この課題に対し、ワサビ生産の環境保護と観光振興との両立という観点から、ワサビ生産者を最優先した、生産者が許容できる観光の在り方を探求することを研究の目的とした。

3 研究の内容

ワサビ生産者が観光客を許容でき、かつ観光客が満足できるような狭いスイートスポットがどこにあるのかを探求した。また、伊豆市担当者との事前打合せの際、今回のツーリズム検討に「サイクリングツアーを想定できるのか、観光客に対しどのような内容のツアーを提案できるのか検討してほしい」と依頼を受けたため、サイクリングツアーの需要や内容も模索した。

本研究では、伊豆市から頂いた市の観光客の統計データ（非公開）の検討、伊豆市担当者との事前打合せ、現地調査を実施した。

先行研究の検討から観光客の傾向を把握した。伊豆市の観光客のメイン層は、中学生以下の子育てファミリー層とシニア夫婦層だと明らかになった。

現地調査では、まず筏場地区のワサビ生産者と伊豆市内の飲食店経営者へのインタビュー調査

を行った。筏場地区のワサビ生産者に対するインタビューの結果、ワサビ生産時に使用するモノレールの前や橋をふさいで駐車する観光客や、たばこのポイ捨てをする迷惑行為が存在することが明らかとなった。

伊豆わさびビジターセンターを拠点としたサイクリングマップの作成のため、周遊先の検討が必要であった。事前に検討されていた周遊ルートを中心に自動車と自転車で周遊した際の印象の差を比較した。周遊先は、伊豆わさびビジターセンター、温泉自販機スタンド、貴僧坊水神社、たか惣（生産者直売所）、筏場のワサビ田、大見屋（生産者直売所）、萬城の滝の計7箇所である。

4 研究の成果

ワサビ生産者が許容できる新しい観光の在り方として「アンバサダーツーリズム」を考案し、リーフレットを作成した。

(1) ワサビ生産者が許容できない範囲

観光客がワサビ生産を妨げる行為は、生産者にとって許容できないものである。これは一見すると、オーバーツーリズムの問題や、生産者自身が語っていたワサビ生産者の閉鎖性が原因と思われるかもしれない。しかしながら、導線をふさぐ駐車やポイ捨てによって、農作業の効率性が失われることや、汚染された水がワサビの生育に悪影響をもたらす。更に、ワサビ田は足場が狭く、慣れていない観光客にとっては危険である。

ワサビ生産者の立場から考えた場合、ただ単に観光を否定しているわけではなく、ワサビそのものやワサビ生産の環境に対する理解不足が観光を許容できない理由だと考える。

(2) ワサビ生産者が許容できる範囲

ワサビ生産者へのインタビューにより、ワサビの収穫体験に来た地元の小学生の来訪は歓迎していることが明らかになった。これは、子ども達に伊豆市が誇る特産品である水ワサビについての理解を深めてもらうことで、将来的にワサビと深い関係を持つことが期待されるからである。ワサビ生産者が観光客をあまり歓迎しない一方で、観光客に対し「生ワサビの美味しさを知って欲しい」「ここにしかない景観や景色を見て楽しんで欲しい」という想いもある。ワサビに興味を抱く人や、ワサビを評価し、購入してくださる人も許容されることが分かった。

(3) サイクリング周遊ルートの検討

調査の結果、次の点が自転車ならではの楽しさだと考えられる。全身で伊豆の清流と触れ合えるという特別な面白さがサイクリングでの周遊では味わえること。自動車で周遊する際には楽しむことができない魅力にサイクリングで周遊する際には気づくことができること。

他方で、移動手段に関わらず、周遊した際の印象に残ったことの共通点として次の点が挙げられた。「涼しさ」「澄んだ水の美しさ、心が洗われる感じ」「水音の心地よさ」「ジブリアニメに出てきそうな景観」「ひっそりとした独特の空気感」がある。また、伊豆わさびビジターセンターでワサビの生態や生産方法の説明を受けたからこそ、周遊している際に景観の良さ以上の面白さを感じることもできたようにも思える。

生産者から許容されない観光客の行動として、勝手にワサビ田に侵入されることが挙げられて

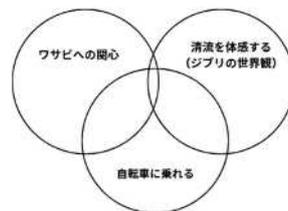
いた。しかし、貴僧坊水神社やわさびの大見屋に隣接するワサビ田は収穫体験（季節限定）も行っており、観光客がワサビに触れることができる場所となっている。したがって、筏場のワサビ田は主として景観を楽しむ場所、貴僧坊水神社とわさびの大見屋は伊豆ワサビと近くで触れ合える場所という、観光目的の役割分担をすることで、ワサビ生産の妨げにならないワサビ田の観光が実現できると考える。

5 課題提出者・地域への提言

本研究では生産者が許容できる観光のあり方を探求することを目的としたが、この目的に対して「アンバサダーツーリズム」という提案が出来る。これは当研究チームが考案した観光のあり方であり、ただ景観を楽しむだけでなく、現地の場所や背景等の物語性を理解し当事者性を深める観光のあり方である。類似する言葉との違いは以下の表にまとめる。

項目	内容
アンバサダーツーリズム	ただ景観を楽しむだけではなく、現地の場所や背景などの物語性を理解しオーナーシップ（当事者意識）を深める観光のあり方。
観光大使(アンバサダー)	主催者から依頼を受けて観光の広報をする人のこと。
スタディツアー	学習目的の旅行で、対象への関心の有無は問わない。
インフルエンサー	自称による非公式な情報発信者。

ワサビ生産者への聞き取り調査からワサビ生産者が望む観光客は、将来的にワサビ生産に関わる可能性がある人、若しくはワサビ生産に対してのオーナーシップを強く持ってくれる人であるという事がわかった。「アンバサダーツーリズム」はその意向を組んだ観光の在り方である。



(図1 狭いスイートスポットを表した図)

当研究チームは図1のように、ワサビへの関心を持っていること、清流を体感できるジブリのような世界観に興味があること、自転車に乗ることが出来ることという3つの条件に重なる部分に狭いスイートスポットがあると考えます。アンバサダーツーリズムは、この狭いスイートスポットにおいてワサビの生産環境の保護と観光振興の両立を実現できると考えられる。

具体的な伊豆での「アンバサダーツーリズム」の内容として、まず伊豆わさびビジターセンターで職員からワサビ生産の環境や現状について説明を受け、予備知識を身に着ける。説明を終えた後に伊豆わさびビジターセンターから始まるサイクリングコースを周遊する。周遊後、旅行者にクイズに回答していただき、全問正解者には認定証を授与する。これにより、観光客のワサビ生産に対する造詣を深めることで、ワサビ田周辺での観光モラルとワサビ生産への理解が高まることに加え、伊豆ワサビのファン化（当事者意識）が期待できる。

アンバサダーツーリズムの成果として、ただ景色を見る観光以上に伊豆のワサビ生産のバックグラウンドを知った上で、ワサビ田の景観を楽しむことができるほか、観光から帰った後にも、ワサビの正しい情報を周囲の人に普及するという期待もできる。

最後に、インタビューに協力してくださった、農家の方々、飲食店の方、伊豆市での調査に様々な場面でご協力いただいた市役所職員の方に、厚く御礼申し上げます。

6 課題提出者・地域からの評価

「静岡水わさびの伝統栽培」が世界農業遺産の認定を受けて以降、特にインバウンド旅行者によるワサビ田を見学したい要望が増えている。一方で、ワサビ田は観光地ではなく生産地であり、観光客を受け入れることを想定していない。観光地化しなかったからこそ、現在のワサビ田の景観を維持し、産業として発展することが出来たと考えられる。

また、ワサビ生産環境は全国でも限られており、特に伊豆市産のワサビは全国の中央卸売市場から高い評価を得ているため、観光客対応するよりもワサビ生産に集中した方が所得増を期待できることもあり、観光受け入れ体制が進んでいない状況にある。このような生産と観光が相反する環境だからこそ、他には無い観光需要が生まれているのではないかと考察される。今回、静岡県立大学国際関係学部湖中ゼミの皆様にご協力いただき、この相反する「ワサビツーリズムの在り方」について調査検討いただいた。

伊豆市は東京五輪・パラリンピック 2020 大会の開催地となった経緯もあり、自転車まちづくりを推進している。また、ワサビ田周辺は駐車場がほとんどなく、生産者に対する配慮と自然景観を楽しむという観点から、サイクルツーリズムについても検討いただいた。調査結果は、学生の皆さんらしい意見をまとめていただけたことや、実際に自転車で走る前と後では、調査の熱の入りが変わったように感じて、「体感する」ことの重要性を再認識した。

現在、若者のワサビ離れが進んでおり、そもそもワサビを食べたことがない、見たことがないという状況は、将来のワサビ食文化にとって良いものではない。どのようなアプローチで伊豆のワサビを知ってもらうか、さらに一歩踏み込んで産地の状況やワサビがどのような場所でどうやって作られているかが重要であり、これらを踏まえて「コアなワサビファン」を増やしていきたいと考えている。

今回のワサビアンバサダーツーリズムは、観光客がワサビ生産者の当事者意識を持つことで、ワサビの世界をより深く知ることができるアプローチ手法であり、新たなワサビ文化に触れるキッカケの1つとなりえるのではないかと感じる。ワサビ生産者に理解いただけるツーリズムの在り方や実際の販売についてはまだまだハードルが高い状況にあるが、今回調査・検討いただいたモデルルートについては、レンタル自転車があれば、実証可能なものとなっており、具体的な事業実施に活かしていきたいと考えている。

最後に、大学4年間最後の夏休みの間で、かつ卒業論文で忙しい中、御協力いただいた湖中ゼミの皆様にご感謝申し上げますとともに、コンソーシアム事業に応募いただき、市の事情を柔軟に御理解いただきながら、成果の方向性をしっかりと正していただいた湖中教授に厚く御礼申し上げます。